



プロローグ

桐生のノコギリ屋根工場の魅力

『ノコギリ屋根に魅せられて』

実家で目にした一枚の写真、それが私とノコギリ屋根の出会いでした。その写真が気になり、実物を見に出かけた私は、感動でその場に立ちつくしてしまいました。時が止まってしまったかのような光景の中に立つノコギリ屋根工場は、大地にゆったりと佇み、物静かに呼吸をし、歴史を物語っていました。工場とは名ばかり、迫力ある建築物。その日から私は、何かに取り付かれたように、一棟一棟のノコギリ屋根の歴史を刻み込むように、カメラに納めてきました。

ノコギリ屋根とは、屋根の一形式で、ノコギリの歯の形をしたギザギザ三角屋根をいいます。採光面（ガラス面）から光を採り入れるもので、紡績・綿布・織物・染色などの工場建築に用いられます。日本では明治16年建築の、大阪紡績工場からと聞いています。棟数では、現在も200棟以上残る群馬県桐生市です。市内最古は、明治35年建築のノコギリ屋根があります。私の撮影は、この桐生市から始まり、関東甲信越、東海、中部、北陸地方とつづいています。現在800棟以上のノコギリ屋根に出会っていますが、不思議と同じ建物はありません。木造、石造、煉瓦、鉄骨と変化に富み、当時の職人の知恵と技、内部構造の巧さ、ディテールの美しさに感動し、実に奥の深い歴史の重みを感じます。ノコギリ屋根の特徴といえば、採光面から光を採り入れることですが、各地方によりいろいろ工夫がなされています。通常、採光面は北側に採り、一日中均一な明かりが得られるようになっていますが、採光面を南に採り、明るさより暖をとったと考えられる工場もあります。三河木綿の産地で、現在も約100棟近く残っています。綿布工場のため、たぶん仕上がりの点検ではなく、環境を考えていたのかと思います。話によりますと、日射しが差し込んで暖かいけれど、夏は暑すぎて、よしずで防いでいる、とのこと。また建物の色にも特色があります。特に印象深い地方は、愛知県知多半島、東浦周辺です。この地方も木綿の生産地だっただけに、現在も約60棟近く残っています。迷路のような路地が多く、一步踏み込むと、ずっしり構えた黒一色のノコギリ屋根が見えます。海からの潮風で錆を防ぐため、黒い塗料を塗っているそうです。「ガンギリ」と呼ばれ、屋根は瓦葺きがほとんどです。路地の町並みは叙情的で、城下町のような感じでした。また赤一色のノコギリ屋根は、絹織物の産地だった山梨県富士吉田市です。市内には約20棟近くあります。採光はガラスが多く、巻き込み形のノコギリ屋根です。赤いベンキが一番安いから、という話でしたが、青空に映え渡る赤一色のノコギリ屋根は、爽快でした。

思い出深いノコギリ屋根工場は、絹織物産地の新潟県五泉市でのことです。雪国での欠点は、とにかく重労働な雪下ろしです。しかし南側からの直射日光は、コントラストが強すぎて、糸の品質や絹織物の仕上がりが具合がよく確認できない。機械工場にとって、北側から差す日光が最高、だからノコギリ屋根以外は考えられない。雪下ろしは重労働ですが、工場を建て替えるつもりはない。ノコギリ屋根もそうであるように、伝統に培われた絹織物産地を、今後も守り抜いていきたい。と話さ

-4-

れた工場長の職人気質は、忘れられません。こうした欠点から、雪国、北陸地方などにもノコギリ屋根は残っていますが、ドーム型に建て替えた工場が多く見られます。

各地に残るノコギリ屋根工場を探して撮影していると、いろいろな面で日本の姿が見えてきます。日本の産業が大きく発展してきた裏には、職人たちの日々の努力があり、巧みな技があったからだだと思います。その証が近代化遺産、産業遺産の形として残っています。しかし近年急速に、都市部以外でも再開発が進み、こうした近代化遺産、産業遺産は取り壊され、大型ショッピングセンターやマンション、分譲住宅に姿を変えています。時代が変化し、人々の生活様式も変わり、簡単便利が近代的な生活とされています。その結果、日本国内どこへ行っても同じような建物、同じような店ばかりとなり、その町の顔や文化もなくなりつつあります。しかし悲観ばかりではありません。近代化遺産に関する保存と活用は、各地で積極的な取り組みが行なわれています。残された産業遺産、身近に埋もれた歴史遺産を、新たな地域資源ととらえ、観光や町づくりを活用する動きも広がっています。桐生市では、現在も250棟以上残るノコギリ屋根工場を産業遺産とし、自信と誇りを持ち、町の顔、町のシンボルとし、歴史を生きてきた古き良き物に触れてもらう活動が活発に行なわれています。昨今、少子高齢化が進む中にある「まち」の機能が失われつつあります。いまの私たちに求められているのは「まち」を知り、「まち」を残し、未来の子供達が愛する「まち」を創造し、次世代に引き継ぐことです。先達の残した知恵や経験が、途切れないように、「まち」の記憶を伝えるのが、高齢者です。高齢者と地域との係わりは、人は人として、あらゆるものを生き継ぐための、欠かすことのできない、大切な営みだと考えています。それぞれが持つ地域固有の文化、歴史、産業、あらゆるものを後世に残し伝えること、「多世代交流の伝承活動」これを皆でつづけていきます。と老人クラブの先輩が頼もしく語っています。操業している工場、していない工場を訪ね、ノコギリ屋根について伺いますと、取り壊さず残したい。活用することで残したい。残し伝えたい。の言葉から、織物産業を築き上げてきた、職人の証である「ノコギリ屋根」を、私は写真家として、伝え残す使命感を感じます。

ノコギリ屋根のルーツを求め、発祥地であるイギリスのノコギリ屋根を撮影してきました。1827年建築のMOSCOW MILLは、イギリス最古の紡績工場です。現在はOSWALD TWISTLE MILLSと称し、資料館と生活雑貨のショッピングセンターになっています。187年前に建築された工場は、当時のままの姿で活用されていました。ノコギリ屋根の店内は、自然光が差し込み、爽やかな空間を提供していました。

イギリスは産業革命発祥の地であり、工場建築の発祥は機械工場の成立とともに始まりました。今回の旅は限られた期間と範囲でしたが、約50棟以上のノコギリ屋根を確認することができました。イギリスでは、文化の違い、意識の違いなのか、市民は古い建物を大切にしていました。しかし、日本同様、操業している工場は少なくなり、保存活用されぬまま取り壊され、大型ショッピングセンターやマンションに姿を変えていくケースも見られます。産業革命で富を得た企業家は、膨大な土地と建物を後継者に残しましたが、紡績業が衰退し、膨大な敷地と工場が残り残りました。そんな後継者を訪ねると、この歴史ある工場を取り壊さず、ノースライトギャラリーと名付け、見事なノコギリ屋根のギャラリーとして、保存活用していました。ここまでの形にするには、山ほどの困難があったと聞きましたが、先祖が、職人が築き上げてきたMILL、歴史を生きてきた工場を残す選択をし、このギャラリーを

-5-

立ち上げたそうです。日本のノコギリ屋根の写真を見ながら、イギリスのノコギリ屋根の利点や欠点が共通するノースライトの話はつきませんでした。海を渡り、先人たちが運んできた職人の技は、私たちが伝え残していかななくては、日本の文化、歴史は残りません。誇りと自信に溢れたイギリスのノースライトギャラリー、100年以上も先輩のノコギリ屋根を訪ね、自国の歴史、文化に対する思いや考え方を学びました。帰国途中、岡山県の工場を訪ねたときのことを思い出しました。工場内部に、毛筆で大きく書かれた言葉がありました。「いまやらねば いつだれがやる わしがやらねば だれがやる」工場長は言いました。好景気の頃は、仕事が優先で、目にも止まらなかったのですが、不景気になり、気がついたことがあります。この地で、先代が築き上げてきた伝統を、残していこう。「いまやらねば いつだれがやる」ここで終わってしまう。という危機感を感じながら頑張っています。職人の意地と魂の声が聞こえてきました。日本の産業を築き上げてきた「ノコギリ屋根」工場建築に、これほどまでの歴史的文化的文化があるとは、脱帽です。と同時に、写真を通して、ノコギリ屋根の魅力を発信しつづけてまいります。

吉田 敬子(写真家)

(以下8ページにわたる写真は吉田敬子氏が永年にわたって撮影してきた貴重な写真であり、本報告書ではノコギリ屋根工場をより理解してもらうために特別に協力してもらい掲載した。写真の著作権は吉田敬子氏に帰属している。)